

# 歌枕「末の松山」と海底考古学

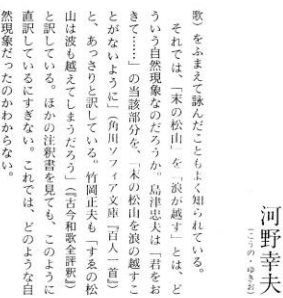
河野幸夫  
（こしのゆきお）

「波越す」  
は津波か

「百人一首」に、  
契さなかにみ  
袖をしほりつゝ末  
の松山なみこさじ  
とは」という歌が  
あることは、だれ  
もが知っている。

『拾遺集』卷四  
に入っている清原元輔（九〇八、九一九）の歌である。  
『古今集』卷二〇の、東国の民謡といわれる「君をおき  
てあだし心をわがもたは末のまつ山浪もこえなん」（東

図一 仙台平野の津波遡上範囲 (M8.2)



歌をふまえて詠んだこともよく知られている。それは、「末の松山」を「浪が越す」とは、どういふ自然現象なのだろうか。島津忠夫は「君をおきて……」の当該部分を、「末の松山を浪の越す」とがないうように「角川ソフィア文庫『百人一首』」と、あっさり訳している。竹岡正夫も「すゑの松山は波も越えてしまおうだろう」（『古今和歌全評』）と訳している。ほかの注釈書を見ても、このように直訳しているにすぎない。これでは、どのような自然現象だったのかわからない。

海底考古学との関連は、ここから始まる。結論をいえば、その昔、この地方に大きな地震があり、太平洋から大津波が押し寄せ、「末の松山」を飲み込んで内陸へ逆流したのではなかったか。そのときの恐ろしい情景

が、この歌のなかに「記憶」されて残ったのではないが、  
こういえば、国文学の専門家は笑うだろう。それは当然のことだ。なぜなら、「末の松山」が東国のどこなのが全くわからない。現在、宮城県多賀城市八幡の宝国寺の裏山がそこだといわれており、江戸時代から権威のある歌枕の解説書・研究書には必ずそう書いている。だが、金沢規雄が明らかにしたように、旧仙台藩内の数ある歌枕遺跡は、すべからず藩主や文人たちが一七世紀に定めたものであって、『古今集』の昔から存在していたわけではない（注1）。

すぐ近くの平地に歌枕遺跡「沖の井」（沖の石）がある。その形状は河岸ないし河口近の岩石群そのものである。ほかにも、こうした地理的証拠はある。しかし、だからといって宝国寺の裏山が本当に平安期の歌枕の「末の松山」であり、この細長く続く小山を大津波が襲ったとはいえない。なぜなら、海岸に松山がせり出す風景はどこにも見られるからだ。そこを「松山の末」とか「末の松山」とよんだことは容易に想像できる。だが、場所を特定することはかなりむずかしい。最初は地名だったとしても、和歌に慣習的に詠まれるよう

になれば「歌枕」であり、特定の場所を表現するものではなくなる。（愛の約束を破る）を表現するための記号なのである。だから、「末の松山」は和歌の世界に存在するというべきであって、現実の世界に存在する地名ではない、といったほうがあたっている。

「君をおき」の歌は、『古今集』の「東歌」に入っている。だが、東国の人々がうたっていた民謡と断定してよいのか。解決は専門家に任せるが、都人によって東国の歌とされ、表現も手直された可能性があるのではなからうか。

したがって、海底遺跡や文献の調査をもとに「末の松山」を大津波が越えた、というのはいわゆる仮説であることであらうかとお断りしておかねばならない。海底に見いだされる異常な形状（遺跡と思われる）から、また、『日本三代実録』などに記された出来事から、総合的に判断すると、宮城県多賀城市・七ヶ浜町の真ん前に広がる太平洋に、平安初期に大地震が発生したと、考えられる。そして、大津波が山々を越えて逆流した。そのときの情景が「末の松山」を浪が越えるという和歌の表現に、「記憶」として眠っているのではないかと、考えるのである。